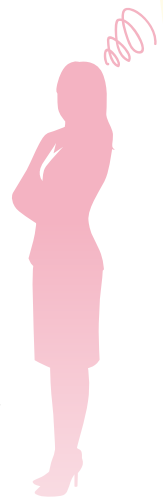


女性が抱える

健康問題とその予防



第4話

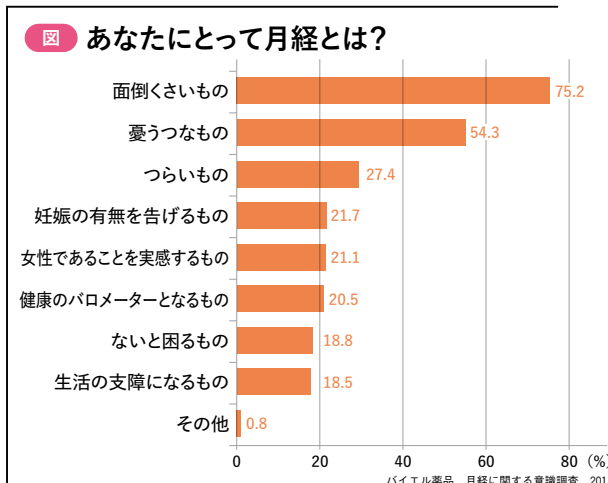
「月経を支配する女性」になろう

「月経」といえば、ナチス・ドイツから逃れ隠れていた間にユダヤ人少女アンネ・フランク(1929～1945)が架空の友人に宛てて書いたという「アンネの日記」が今もなお読まれ続けています。そこには、「メンスがあるたびに……といっても、まだ3回あったりですが……面倒くさいし、不愉快だし、うっとうしいにもかかわらず、甘い秘密をもっているような気がします。ある意味でやっかいなことではないのに、そのつどその内なる秘密がふたび味わえるのを待ち望むというの、たぶんそのためになかなかありません。」とあります。この「面倒くさいし、うっとうしいが、甘い秘密」という表現は、女性にとって月経はとても大切なことだという意味合いを感じさせます。

ある製薬企業が2010年8月に、20～49歳の女性930人を対象に実施した「月経に関する意識調査」で、「あなたにとって月経とは？」と聞くと、75.2%が「面倒くさいもの」、54.3%が「憂うつなもの」、27.4%が「つらいもの」と回答しており、「女性であることを実感するもの」(21.1%)、「健康のパロメーターとなるもの」(20.5%)などに比べて圧倒的にネガティブに捉えていることがわかります(図)。

このような訴えを改善する目的で開発され、利用されているのがLEP製剤。低用量エストロゲン・プロゲステン製剤のことです。これは月経困難症に効能・効果がある薬で、保険適用のあるお薬です。成分は避妊薬であるピルと同等ですので、避妊効果が約束されるのは当然です。わが国でも2008年から続々とLEP製剤が発売されており、周期的に月経が来るようにする方法(周期投与方法)、120日を限度に月経を起こすフレキシブル投与方法、77日間女性ホルモン製剤を服用し7日間休薬する3周期連続投与方法などがあります。連続投与方法の方が、周期投与方法に比べて「生理用品の必要な日数」「腹部膨満感のある日数」「月経痛のある日数」が短くなることから、世界ではより高く評価されています。ピルを飲むと血の塊(血栓症)ができてやすいことがしばしば話題になっていますが、連続投与方法と周期投与方法との間での差はないとされています。とはいえ、服用中に激しい頭痛、胸が苦しい、太ももの左右差が目立つなどに気づいたら、遠慮せずにかかりつけ医に

相談してください。このようにピルやLEP製剤をはじめとした女性ホルモン製剤を上手に使うことによって、月経の回数を減らすこと、月経周期を調節することなどコントロールは自由自在。まさに「月経を支配する女性」になれるのです。



[執筆者]
北村 邦夫
きたむら くにお
日本家族計画協会 会長

自治医科大学を1期生として卒業後、群馬県庁に在籍する傍ら、群馬大学医学部産科婦人科学教室で臨床を学ぶ。1988年から日本家族計画協会クリニック所長。東京都予防医学協会理事、日本母性衛生学会常務理事。2018年より現職。